

清末民国期莒州大店鎮の莊氏と地域社会:咸豊年間捻匪の襲来を中心に

荒武 達朗

はじめに

抗日戦争期の中国共産党による地域権力確立の過程は、新中国成立へ帰結したその勝利の要因を解明する上で取り組むべき重要な課題であると言えよう。長征によって陝西省へと拠点を移した時点では、華北で有していた権力基盤は薄弱なものであった。にもかかわらずこの期間に解放区を拡大して、共産党が国民党に十分に対抗できる勢力へと成長していったことは周知の事実である。

この問題に対しては今に至るまで多くの研究・ルポルタージュが言及している。古典的な著作では以下のようなものが挙げられるだろう。例えばマーク・セルデン『延安革命』¹⁾は、共産党の掲げる中国の解放という理想、抗日戦争への献身、加えて土地政策の実施に見られるように農民大衆の利益を代表した事が地域住民を引きつけたのだ、という構図を提示している。この前提には、地域社会において「農民大衆」対「地主」という対立関係が設定されている。内戦期のルポルタージュであるヒントン『翻身』²⁾の視点はより明確であり、村落内に張り巡らされた地主・郷紳を中心とする封建的支配の枠組みを共産党の主導する運動が切り崩していったのだ、という認識に基づいている。この舞台、山西省東南部の山岳地帯の張荘村における土地改革以前の所有地・役畜の分配状況は、地主による封建的支配を裏付けていると言えよう。本村戸数の五％である地主と富農が土地の四五％を所有する一方で、戸数の六二％を占める貧農と雇農が所有する土地は二四％に過ぎない³⁾。貧農と雇農は常に飢餓線におかれており、さらに地主の野蛮な封建的支配を実証する資料は枚挙にいとまがない。

ところで、これらの著作において前提とされている地主と農民の対立の図式は妥当だろうか。共産党が大多数の農民を味方に付けることで少数の地主による非道な村落支配を打倒し、それによって自らの権力基盤を拡大したというモデルは理解しやすい。しかし実像をどこまで反映しているかは疑問である。一方、これらを批判しつつ、何高潮『地主・農民・共産党』は、ゲーム理論を適用し、抗日戦争期の地域社会に中国共産党と地主と農民の三者をプレイヤーとして設定、それぞれの間に成立⁴⁾する対立と妥協のメカニズムを検討した⁵⁾。そこから共産党が減租減息運動を通じて地主を牽制、農民を動員し、地域社会を掌握していくプロセスを論じた。地主と農民の間にもともとあったパトロン・クライアント関係、具体的には「納租（小作料の納付）」と「賑災（災害時の救済）」という相互依存によって成立していた関係の中に、新たなプレイヤーである共産党が参入する。共産党は懐柔と強制の圧力をかけてその変容を迫り、そこから三者間での均衡点が探し出されていくことになった。何氏のモデルは実証性には乏しいものの、前述のセルデン氏やヒントン氏が前提としている地主と農

民の対立を一端捨象しているという特徴がある。田中恭子『土地と権力』⁹⁾は、抗日戦争期から内戦期にかけて中国共産党による農村支配が固められていくプロセスを述べている。時として政策の急進化や暴走、所謂“左傾”を伴いながらも、大衆運動にて村落内の富と権力を再分配することで、人々の支持を広げていった。抗日戦争期の減租減息運動（小作料・利子率の減額）に加えて、かつての収奪や乱暴行為といったものまでもが「旧債」といった形で批判され、地主から「闘争の果実」が徴発され農民に分配された。ここで農民は共産党を支持し、或いは抵抗することの不利益を知りそちらへと傾斜していく。

筆者は前稿において、日中戦争下の山東省南部の莒南県大店镇という一つの地域社会をフィールドとして中国共産党による地域権力の確立を論じた⁶⁾。日本軍、国民党軍、共産党軍が混在し、そして当初は必ずしも地域住民が好意的ではない状況下で、如何にして地域住民を引き寄せて勢力を拡大していくか。彼らは軍事状況をふまえながら、郷村の従来のものである地主層の勢力の削減と一般農民の巻き込みをはかった、とした。結果地主・士紳を基軸に取り結ばれていた秩序は、共産党を基軸とする新しい社会関係・秩序へと再編されるのである。

この清末民国期の華北の村落において成立していた秩序という問題では、馬場毅『近代中国華北民衆と紅槍会』⁷⁾が重要な論点を提示している。紅槍会とは「赤い房のついた槍を持ち“刀槍不入（刀も槍も体を傷つけることが出来ない）”の信念で団結した秘密結社」である⁸⁾。一九二〇年代華北では、軍閥の混戦、自然災害、土匪の猖獗が村落に危機を及ぼした。国家が直接・間接的に担うべき村落の秩序維持が為され得なかった為に、地主・富農・自作農が結集し多くの村落を連合して、防衛組織としての紅槍会が発展した。一九二九年以降は国民政府による華北の実効支配が確立し、住民にとって脅威であった軍閥の現地給養が停止され、さらに民団や紅槍会が統治の末端に組み込まれることによって、次第に存在意義が薄れその闘争は沈静化していった。ところが、一九三七年に日本軍が華北に侵入した後、山東省主席の韓復榘の命により黄河以北から官僚と国民党が撤退したため、国民政府の統治機能は麻痺し崩壊した。農村は統治の空白化、土匪と敗残兵の襲撃、日本軍の侵攻に直面し、再び紅槍会の活動が盛んになったという。このような民間の宗教結社や在地防衛組織が地主・紳士など村落の支配者層の指導下にあった事は注目に値する⁹⁾。そこからは村落を防衛するという共通の目的の下では必ずしも農民と地主が敵対関係にはなかったとの推論が生まれよう。一方で共産党が紅槍会の取り込みをはかったことはつとに知られているけれども、必ずしも両者が友好的な関係に無かった場合もある¹⁰⁾。

本稿で問題とするのは、共産党がその支配を試みる以前に地域社会において成立していた秩序のあり方、或いは地主の地域社会における位置づけの再検討である。ここで森正夫氏によって提示された明代郷紳の江南地域社会における存在形態の分析は多大な示唆を与える¹¹⁾。氏は彼らを、出世して金儲けをする“陞官発財”型の大多数の者と、少数ながら世を治め民を救うために地域社会の問題に積極的に関わろうとする“経世済民”型の者とに分類した。この両者の志向は清代に希薄になり、郷紳は私的な関心の下で生活を送るようになり、後者の志向の担い手は生員の下層に属する者になったのではないかとされる。本稿とは時代も地域も異なるのだが、地域社会における地主と農民とを敵対的に位置づける傾向にあった古典的研究の再検討にとって、重要な方向性を示していると言えよう。

本稿は前稿で曖昧に扱わざるを得なかった打倒された地主の姿を復元することを目的とする。特に十九世紀後半の清朝末期、地域を襲った混乱に地主やその他の地域社会の住民がどのような対応をしたかということを中心に論を進める。地域は前稿と同じく山東省南部の莒南県大店鎮に設定し、「莊氏」という地主の一族を対象とする。

使用する資料は民国二十五(一九三六)年に刊行された『重修莒志』(以下、『莒志』と略記)¹²⁾という地方志を主とする。『莒志』は民国二二(一九三三)年冬に当時の莒県県長唐介仁の発起によって編纂が開始された。同年県志局が設置され、翌年には莊氏族である莊陔蘭が総纂に招かれた。一九三五年に初稿が完成し、さらに翌年夏に一万部が刊行された¹³⁾。総纂が莊氏族であることからその内容は地域の士紳、中でも莊氏を称揚する傾向が濃厚である。その点は割り引いて考えねばならないが、士紳の行動の一端やあるべき理想像をかいま見ることが出来る。これに加えて一九九八年刊行の『莒南県志』(以下、『県志』と略記)¹⁴⁾及び共産党が作成した莊氏に関する報告や新聞記事を使用する。山東省南部の典型的な“封建地主”として闘争の対象になったため、莊氏については比較的豊富な資料が残されている。無論この共産党による資料はその立場によって書かれており、政治的宣伝の意味合いが濃いものもある。その点は注意が必要であるけれども、党内部向けの報告文書の記述は宣伝色が薄いのである程度信用できる。地方志と共産党資料の両方を参照することで地域社会における地主の姿を立体的に解明できるのではないかと筆者は考える。断っておかねばならないが、本稿の記述においては、大店莊氏という宗族の歴史を記した“族譜”が重要な資料となる。しかしこの『大店莊氏族譜』は執筆段階(二〇〇一年八月)では、どの機関に所蔵されているかも不明であり未見である。【補注】

本稿において用いる“地主”という用語について説明しておきたい。ここでの地主は大土地所有を実現したものであって、労働力不足等で土地を小作に出さざるを得ない零細土地所有者を除外する。地域社会において名望を有し政治的・経済的に主導的立場にある“士紳”“郷紳”と不可分のものであるとする。

第一節 清末から民国期にかけての大店鎮

莒南県は清代の莒州(一九一三年に莒県に名称変更)の南半分である。一九三九年六月一日、日本軍は二万人余りの兵力をもって魯中と魯東南地区で掃蕩作戦を実行した。六月十一日には莒県城が占領され、大店鎮などの拠点、県を東西南北に縦横断する道路が日本軍の支配下に入った。結果、従来の莒県の領域での行政が困難且つ不便になり、同年七月高家溝村において莒南県委が正式に成立、莒南県の新設にいたるのである。大店鎮はその後四〇年十一月に再び奪還される。翌四一年一月にはここで莒南県抗日民主政府が成立するが、終戦までしばしば日本軍の攻撃を受けた¹⁵⁾。

莒南県は全県の三分の二を丘陵地帯が占めており¹⁶⁾、山東と江蘇の省境、沂蒙山地の東南、五蓮山の西南に位置する。この二つの山地のつくる谷間は莒県城を経て諸城県へと通ずる。南側は江蘇省北部の淮水流域の大平地帯まで沂水と沭水の両水系のつくる起伏のなだらかな地形が続いている。

民国二二(一九三三)年一月になってようやく山東省南部の台兒莊から臨沂、莒県、諸城を経て膠

済鉄路沿いの濰県に至る台濰汽車路（自動車道路）の建設が開始された。丁度、沂蒙山地と五蓮山の間のなだらかな谷間に沿っていくものである。このような交通の不便さと流通の要路からはずれたところに位置するが故に、当地域への商品経済の浸透は山東省の他の地域に比べて緩慢であった。

「此の三者（※工・商・農）莒に一有り、曰く農のみと。工無きに非ず、農にして工なり。商無きに非ず、農にして商なり。秫を醸して酒を為り、豆を搾りて油を為るは、皆な即ち農産物もて之を製造す。冶者、陶者、梓者、輪者、織者、染者、只だ以て農村の用に供し、分塵列肆、行商坐賈、皆な農家者の流なり。工商を業とするも必ず農を兼ね、農に帰せざれば則ち其の業を敗す。

農豊かなれば則ち工恵みて商贏ふれ、農歉なれば則ち工は坐食して商は屋を仰ぐ。……。」¹⁷⁾

この地域の主要産業は農業である。工業や商業も存在するが、そのどれもが必ず農業を兼営し、当地の農産物を原材料として農村用の物品を製造し販売する。地域の産業はひとえに農業の状況如何に規定された。この農業が中心となる産業構造は、当地域を含めた山東省地主の経営と成長のスタイルの地域間比較からも指摘できる。景甦・羅崙氏が一九五七年に山東省の中から四六県一三一個村を対象として書簡にて実施した調査は¹⁸⁾、個々の地主家族の成長要因を、商業によるもの「経商起家」、農業によるもの「種地起家」、官界への進出或いはそれとの接触によるもの「作官起家」の三種に分類している。商品経済の発達した山東省中心部「済南一周村区」の五二例の内、「経商起家」が二八例、「種地起家」が二〇例、「作官起家」が四例となっている。これに対して当地域が含まれる山東省西部から南部にかけて「魯西一魯南区」の二七例では、それぞれ十四例、十三例、〇例となっており、成長における農業経営の地位が相対的に高くなっている。済南一周村区の地主が、獲得した利潤を商業へと投資するのに対して、魯西一魯南区の地主は商業ではなく土地への投資、つまり土地の集積を経営の重点としていた。無論、山東省南部に商業が全く存在しなかった、というのではない。伝統中国においては商業のみ、或いは農業のみというような経営は少数である¹⁹⁾。一般的には「経商起家」「種地起家」は複合的な意味合いで、商業と農業のどちらに重点が置かれているか、ということを表している。投資の行方が山東省の中心部では商業に向かう傾向にあったのに対して、南部では商品経済の浸透の緩慢さにより商業よりも土地集積の方に向かい勝ちであったということである。

このような土地の集積は一度に大土地片を購入するということによって為されるのではない。一般的には小土地片の購入を繰り返すことにより最終的に大地主へと成長していく²⁰⁾。その過程では必然的に自家から遠く離れた土地も購入せざるを得ない²¹⁾。そのような土地では自家耕作や自らの監督下での雇工経営（雇用労働力を用いた経営）を行えないので、租佃経営（小作経営）にまわしていたと考えられる。先ほどの景甦・羅崙氏の調査の一三一例によれば、自家保有地全てで自ら雇用労働力を用いた経営をする雇工経営のみの地主は、済南一周村区や山東省北部（魯北）に高い割合（四～五割）で存在している。これに対して交通不便で丘陵地帯である山東半島区や魯西一魯南区ではそのような地主はほとんど存在せず、経営の一部に租佃経営を組み込んでいる地主が九割以上を占める。つまり後者の地域の地主は土地が広範囲に散在しており、租佃経営の比重を高くする傾向にある。

民国二四年（一九三五年）四月に発表された莒県への旅行記である李甯「山東農村観感：紀莒県之行」²²⁾には地主の一族（張氏）が存在する張家荘子という村落の描写がある。張氏は莒県でも一、二を争う大地主であり、当地の面積単位で二五頃（二五〇〇畝）の土地を所有する。（面積単位“畝”

は各地によって異なる。この場合畝は七二〇歩の旧畝なので、標準的な官畝(二四〇歩)では七五頃、七五〇〇畝〔一官畝は約六、七アール〕となる。) 一方、邵履均「山東莒県邵泉郷社会状況調査」²⁹⁾によれば、同じく莒県の邵泉郷という村落では全村一五〇戸の内、最大の土地所有者が六三畝(官畝)であり、土地無しが全体の二四%、二〇畝以下が全体の七八%を占めている。一戸当たりの平均土地所有面積は約十六畝である。この一戸当り数値は山東省全体から見ても高い部類であると考えられるが、これと比較してみても張氏の巨大さが目に付く。この張氏の所有地は張家莊子だけではなく周辺各村にも散在し、張氏はこれらの土地で租佃経営を行っていた。加えて幾つかの市場町(市集)にて金融業(高利貸、銀号)や商業(酒店、雑貨舗など)を営業していた。前述『莒志』の記載に従えば、租佃経営からの小作料収入を主な柱として商業を兼営する事が、張氏の財産の来源であったと推測できる。

本稿で扱う大店鎮に居住する莊氏も、この張氏と同じく、地域で有数の大地主一族であった。彼らも租佃経営、商業・金融業の経営、更には官界への進出を通じて経済的のみならず政治的力量をも備えるようになった。このような実力をもって農村に向き合っていたことが共産党による批判の対象となったのである。以下、共産党が到来する前の莊氏と地域社会について述べる。

第二節 大店鎮における莊氏

1. 大店莊氏の履歴

冒頭で述べたように、族譜を確認していない以上、大店莊氏の履歴と実像を解明するには大きな制約がかせられている。そこで本稿では地方志の記述から可能な限り推測していくという方法を採用する。

『莒志』「民社志・氏族」は莒州に居住していた地方の名族を記述したものである。その中の大店莊氏の条には次のようにある。

「……而るに莊氏の譜牒に謂う、原籍は江南東海十八村にあり、明洪武初年莒の朱陳店(※大店)に来たと相伝すと。而して之を證するに正徳六年の興福禪院の鐘、名三代を列するに、其の奉じて始祖と為す瑜は、次は第二代第二名に居れば、以前尚お数代有るを知る可し。特だ旧譜明季の兵燹に燬かれ、考證す可く無し。本県と外県の莊氏の譜を同じうせざる者、亦た未だ敢えて妄りに叙列を為らず、故に譜に曰う、朱陳店莊氏族譜始祖瑜と。二世に五支に分る。……」

今十九世に伝え至り、始祖の塋祠は俱に大店鎮に在り、祭田六畝は大店西湖大橋に坐落す。」²⁹⁾これによれば莊氏はもともとは江南地方に居住していたとされる。十四世紀、明代洪武年間に莒州の朱陳店へと移住してきた。別の資料によると朱陳店とはすなわち今の大店鎮の事である。清代中期に宗族へと成長しつつあった莊氏が、朱陳店という地名が自らの発展にそぐわないと考え、族譜を編纂する機会に大店へと改名したという²⁹⁾。正徳六年(一五一一年)の興福禪院の鐘の銘文には、氏名を三代並べてあり、莊氏が始祖としている莊瑜は第二代の第二名におかれているので、それ以前になお数代あったと考えられる。しかし明清交替期の戦乱によって族譜が焼失したとされるので、この資料の述べる明代前半の莊氏に関しては不明な点が多く伝説の域を超えていない。明末清初に族譜が焼失

したという記述は華北宗族の間でよく見られる常套句である。この時期おそらくは族譜を編纂するほどの宗族を形成するには至っていない一般的な農家であったと考えるのが妥当であろう。

荘氏が財産の集積を通じて莒州の名族へと成長し始めたのは、荘瑜より数えて四代目、明末の万暦年間に生きていた荘謙の頃であると考えられる。

「荘謙。……。万暦戊子郷に挙せられ、己未進士と成る。汝寧府推官を授けられ、法を執りて私無く、卓異を以て晋浙江道監察御史に行取せられ、陝西に出按し、疑獄を平反し、弊を剔き奸を除き、課最は天下第一為り。晩年仕進に恬として、林下に退居し、子弟を督して力学せしむ。

荘氏明初に莒に遷りて自り、世よ農を業とし、読書を以て起家するは謙自り始まる。」²⁶⁾

荘謙は、大店荘氏ではじめての科挙身分の保持者である。万暦四〇（一六一二）年に挙人、ついで万暦四七（一六一九）年に進士に合格している。これは明末の荘氏が族人の科挙受験を可能とする財力を蓄えつつあった事、つまり当地域での大土地所有を実現しつつあった事を証明している。荘謙の合格は荘氏にとって偶然のものではない。事実、この後の荘氏は清代を通じて科挙合格者を排出していく事となる。清代の莒州からは全体で挙人七四人、進士一七人の合格者を排出している。この中で大店荘氏は、荘謙以降清末に科挙が廃止されるまで、延べ人数で挙人が一八人、進士が五人を占めている²⁷⁾。その数は莒県の名族の中で最も多い。また貢生クラスの族人は延べ三五人にのぼり、恒常的に官界へと族人を送り込んでいたと言える。清末に科挙が廃止された後には、多くの族人が中国内外の学校へと入学している。国外留学生七名、国内の大学・専門学校・中学校卒業生が四一名（内、女子が三名）にのぼる²⁸⁾。中でも『莒志』の総纂である荘陔蘭は光緒年間の挙人、進士に合格した後に、日本の法政大学に留学した。族人の科挙受験者の増加、清末から民国期にかけての外国留学実現は、宗族の形成と成長を背景になされたものである。

この荘氏の成長、宗族としての結集力の高まりを支えたものは、土地の集積を主軸においた経営スタイルであったと考えて良い。清代についてはよく分からないが、一九三〇年代の土地所有状況をもとにして荘氏の実態に接近していきたい。中共中央山東分局調査研究室の手による「莒南県三個区十一個村的調査」（以下「莒南県」と略記）は一九四五年夏に、中国共産党山東分局が莒南県の三区十一個村を抽出して行った調査である²⁹⁾。調査村落の中に大店鎮が含まれており、荘氏の実態を伝えてくれる資料の一つである。抗戦前（一九三七年以前）に十一個村の地主戸数は一六九戸であった。大店区の調査村落（大店鎮、將軍山前、何家店、下河）にはその内の一三六戸の地主が集中していたとされる³⁰⁾。全てが荘氏ではないだろうが、この資料が荘氏を調査対象にしていることは明らかであるので、実質上ほとんどが荘氏の族人であると言えよう。内、当地域に三〇〇畝以上の土地を所有する地主が二八戸おり、この所有地だけで一万八八四〇畝に達し、調査地域全体面積の約三分の一を占める。一九四四年五月に実施された大店荘氏に対する闘争の報告書「大店査減闘争総結」（以下「総結」と略記）の記述に基づけば³¹⁾、荘氏は七二の堂号を有する地主家族によって構成され、付近一円の六、七〇か村に土地を所有していたとされる。荘氏は全体としては合計四八〇頃（四万八〇〇〇畝）の土地を所有していたが、実際は一二〇頃を所有する二つの極大地主家族「双柳堂」と「知松堂」を頂点とする中地主と小地主の連合体であったと考えられる。事実、荘氏七二家の内、四四年五月の闘争の対象となった者は四〇家余りであり、これらが主要な地主であるとされていた³²⁾。一九六〇年代に発

表された「大店“莊閻王”罪惡史」(以下「罪惡史」と略記)は、成長過程で農民に過酷な収奪を行い、官界と接触し地方に割拠し野蛮な振る舞いをした封建地主の典型として、莊氏を激しく批判している³³⁾。

四四年の鬪争大会では、自発的に減租減息を行ってきた莊暁光、莊洪来、莊景良、莊彤襄〔字、左宸(臣)〕などの「開明地主」は批判を免れたものの、莊英甫、莊景楼、莊屏舟(平舟)ら七、八名は「封建地主」として批判を受けた。中でも莊英甫は悪逆の限りを尽くしたものとして、一九四七年に処刑された。彼の祖父は莊瑤、父は莊錫績、次項にて詳述するが、彼らは清末の「捻匪」の襲来に際して、地域の防衛に貢献した人物である。

2. 清末「捻匪」の擾乱と地域社会

清末咸豐・同治年間(一八五一～六一、一八六二～七四年)、地域社会を根底から揺るがす事件が発生した。「捻匪」の襲来である。捻匪という呼称は“捻”“捻子”“捻軍”“捻党”というように活動時期、そして研究者の立場によって様々である。本稿では『莒志』で用いられている“捻匪”との呼称に統一する³⁴⁾。捻匪は、太平天国の活動が活発化する中で咸豐三年(一八五三年)安徽省北部で反乱を起こした。その活動範囲は華北の広範な地域、河北・河南・山東・山西・陝西に及んだ。莒州においては、咸豐四年(一八五四年)から同治六年(一八六〇年)にかけて捻匪を含めた匪賊・流賊がしばしば来襲し多大な被害をもたらした。『莒志』の編纂者はその編纂の直前まで続いていた一九二〇～三〇年代の軍閥混戦について以下のような記述をのこしている。

「莒清の咸、同自り以後、久しく兵事無し。偶爾土匪竊かに発すも、旋就に捕滅せらる。間ま明火劫案有れば、官民震駭し、以て巨変と為す。蓋し民の兵を知らざる者久しければなり。……」³⁵⁾

彼らにとって遡ること七〇余年前、清末咸豐・同治年間の捻匪の襲来が地域社会の混乱として記憶され、後まで語り継がれるほどの強い印象を人々に与えたのである。

捻匪の活動の意義は、八〇年代以前の中国では所謂「農民起義軍」の一環として把握されてきた。半封建、半植民地の条件下で地主による収奪と腐敗した王朝の圧政が広範な農民反乱集団を生み出したとした³⁶⁾。しかし捻匪の襲来を受けたその当時の地域社会の視点に立つならば、捻匪の襲来は階級の違いによってその被害を免れるという性格のものではない。そこに生きる人々全体にとっての大問題であったと考えるのが妥当であろう。例えば許檀氏はその論文の中で『咸豐十一年九月被難大小男丁婦女節義紀実』という資料を引用している³⁷⁾。これは山東半島に属する寧海州(今の牟平県)の士紳王夢泉の手によるもので、咸豐十一年(一八六一年)捻匪の攻撃に際して死亡した人口を記録している。許檀氏はこれをもとにして清代の家族規模の復元を試みた。その際、氏はこの資料の有効性に関して、捻匪が農民起義軍であったために士紳が攻撃対象となり相対的の多くの被難者を出した、と一定の留保を付けているけれども、一般農民層も少なからず含まれており社会構成から完全にかき離れたものではない、と評価した。この資料にある「全家同殉」(一家全滅)一九七戸のデータ(内、士紳は九戸を占める)は、捻匪の襲来に際して特定の階級が難を逃れたというものではなく幅広い階

層の人々が命を落とした、という事を証明している。

まずはこの災難が地域社会を襲った経緯を、『莒志』の記述に従って見ることにする。

①咸豊・同治年間莒州の擾乱

莒州北部の士紳、管廷獻は咸豊・同治年間の地域社会の混乱を目撃し、次のような記述を遺している。「莒の匪を被るは、咸豊四年自り始まる。始め賊千に満たず、大店汀水諸村を劫掠して即ち去る」³⁸⁾。莒州における匪賊の害の始まりは、咸豊四年（一八五四年）の事である。当初はその規模も大きくはなく幾つかの村落を劫掠した後去っていった。しかしこの後十年余りの間、莒州は頻りに匪賊の害を被ることとなった。その中でも最大のものが捻匪の襲来であった。以下、地方志の「大事記」と「軍事」の記述に従って事件の過程を追いたい。『莒志』の中では「軍事」の記述のほうが詳しいので主にこちらに依拠する。しかし一部の記述、事件の日付等は「大事記」³⁹⁾に依った。

莒州における匪賊の擾乱は咸豊四年二月に始まった。

「文宗咸豊四年。塩臬の陳玉標、衆千余を聚め、海州自り莒境に竄入す。州城戒嚴し、把総の黄某馳せて朱陳店に至り防堵せんとす。時に臨んで民兵を募り、倉卒に敵に応たるも、賊至りて勢い盛んなれば、民兵の気奪われ、鋒甫めて交して即ちに潰え、黄制止する能わず、隻身にて逃匿す。賊呼嘯して村に入り、大肆に焚掠し、復た良店汀水等の村を寇し、至る所十室に九空たり。安東衛参将郝上庠警を聞き、急ぎ莒日照の郷勇を率い進みて之を剿せんとし、馬髻山下に邀撃す。連戦皆な捷す。玉標東して竄れ、上庠碑廓鎮に追及し、又大いに之を破る。」⁴⁰⁾

この年二月、塩の密売人を出自とする陳玉標という賊が襲来した。彼は千人あまりを率いて、江蘇省の海州方面から莒州の領域に侵入した。州城（州の役所の所在地）は警戒態勢にはいり、把総の黄某という人物が朱陳店（すなわち大店鎮）に赴いて賊を防ごうとした。だが募った民兵は士気が振るわず敗退し、朱陳店、良店、汀水といった莒州南部の鎮や村が掠奪された。ここで日照と江蘇省贛榆県の境、海沿いにある安東衛の参将の郝上庠が莒州と日照の郷勇を率いて来援した。馬髻山の麓で賊を迎え撃ち、これを敗った。陳玉標は追われて東方へと逃れたが、碑廓鎮にて再び撃破された、という。

この後、六年間の空白を置いて、咸豊十年（一八六〇年）九月に捻匪の一部隊が襲来した。「大事記」の記述に依れば今回も莒州の南部の汀水、葛溝が害を被ったとされる。「軍事」の記述には次のようにある。

「咸豊十年。捻匪贛榆を焚掠し、日照莒州を竄擾す。郷民四もに逃げ、全境震恐す。安東衛千総郝元傑、莒日郷勇を率いて之を襲がんとす。界牌嶺に戦い、互に勝負有り。時に日紳の丁守存籍に在りて団練を辦ず。砲を輦きて元傑に詣し、合力して以て拒まんとす。再び匪と戦い陣を布くに方りて、元傑驟かに巨砲を以て之を轟かせば、匪大いに挫かれ遂に退く。」⁴¹⁾

捻匪は江蘇省の贛榆を焚掠した後、山東省の日照と莒州へ来襲した。安東衛の千総の郝元傑が莒州と日照の郷勇を率いて賊を防ごうとし、界牌嶺にて戦ったが勝敗はつかなかった。そこに団練を編成していた隣県の日照の郷紳である丁守存が大砲を引いて援軍に駆けつけ、賊を撃退した。

翌年二月、捻匪の一部隊が莒州の領域内を通過していった。

「咸豐十一年。捻匪山東を寇す、膠澳の間に於いては戦不利にして、管帥由り州境に竄入し、沿途に劫掠し、旋いで南し退く。」⁴²⁾

捻匪は山東半島方面の戦況が不利であったので南下して管帥鎮から莒州へと逃げ込んだ。「大事記」の記述には「(咸豐)十一年、捻匪北自り南して掠す。二月二十九日州境に入り、三十日州城に次り、次日南下す。火光百余里に互り、焚掠殺傷算うる無し」⁴³⁾とある。捻匪は莒州の北から南まで縦断し、その途中の村々を掠奪して去った。

続いて同年秋、再び捻匪が現れた。これまでの匪賊の侵入は、二月の捻匪のように一過性、散発的なものであった。しかし今回の捻匪は数ヶ月にわたって領域内を劫掠した。地方志の記述もより詳細であり、咸豐・同治年間の匪害の中でも特に強烈な印象を人々に与えたようだ。「大事記」には「秋八月初二日、捻匪東南自り境に入る。文武官弁、嬰城固守し、郷兵各の山寨村圩を主り自ら保つ。兩月の間、南北に梭織し、往返すること九次、至る所焚掠し、村居廬舎、蕩然として存する無し」⁴⁴⁾とある。南北を何度も織機の“梭”のように往復する捻匪を避けるため、人々が「山寨」「村圩」といった皆に立てこもったということが窺われるが、これについては後述する。

咸豐十一年八月二日に捻匪は南方より来襲した。この部分の記述は長いので「軍事」を幾つかに分けて検討する。この日付は「大事記」によった。

「…………。秋復た南由り大いに至る。州城掩屯し、村民各の相い聚りて寨を結し自ら保つ。匪首李成州城の堅峻にして仰攻易からざるを以て、附郭廬舎を焚きて以て威を示す。沙溝山の寨に乱を避くる者頗る富室有るを聞くに比びて、围攻して之を破り、肆まに殺戮を行い、尸積むこと阜の如く、並びに其の寨を焚く。時に嶧の賊滕化光、亦た徒千余を率いて莒を犯し、警耗四もに至るも、城防民寨、各自謀を為し、相い救援せず、賊故に逞しくするを得たり。」⁴⁵⁾

賊の襲来に対して莒州の州城は守りを堅くし、村民は「寨」を築いて自らの身を守ろうとした。賊の頭目、李成は州城の守りの堅さにその攻略をあきらめ、城の周囲を焼き払っただけで去った。八月三日、沙溝山に逃げ込んだ人々に富者がいるとの情報を得てこれを破り殺戮と掠奪の限りを尽くした。時を同じくして、嶧県の賊、滕化光が千人あまりを率いて莒州の領域に侵入した。警報が四方に発せられたものの、町の守りと民寨はそれぞれ協力せずに独自に守りについていたために、匪賊の跳梁を招いた。

「…………。更に勝ちに乗じて硯台山民寨を攻め、克くすに垂とす。申三奎なる者有り、火銃を發し数賊を斃すも、賊仍お進攻し、三奎巨石を投じて又た其の三を斃せば、寨中の人の胆少壮なるは、声を連ねて殺と喊す。是に於いて火器斉いて鳴り、木石交もに擲せらる。会ま大風雨あり、山洪爆発し、賊勢い支えず、囲を解きて去る。復た北して玉皇廟民寨を攻むに、山に水無く、围攻すること三昼夜、人多く渴き死して、寨遂に守らず、嚙類遺す無し。」⁴⁶⁾

また賊は勝ちに乗じて、硯台山の寨を攻撃し、皆は陥落す前に至った。しかし申三奎という人物の奮戦によって人々は奮い立ち、持ちこたえた。ちょうどそこに大嵐が到来し山津波が発生し、賊は支えきれず囲みを解いて撤退した。だが八月七日、それより北の玉皇廟の民寨が攻撃を受けた。その山には水が無く、人々は渴きに苦しみ三日の攻防の後に陥落し、皆殺しとなった。

この事態に官軍も手をこまねいていたわけではない。「大事記」の記述によると、「九月初八日、

賊北自りして南す。僧格林沁州東北九十里の將軍嶺に追及し、賊を斃すこと数千。初九日大霧ありて迷漫し、又た城西南の土山湖に追及して、賊を殲して殆んど盡く」⁴⁷⁾とある。九月八日、僧格林沁(サンゲリンチン)の主力部隊が匪賊の一部を殲滅することに成功した。しかしこれで捻匪を全て撃滅できたわけではなかった。十二月、莒南の馬髻山が最大規模の襲撃を受けることとなる。やや長めの文章だが、再び「軍事」の記述を引用する。

「治の南の馬髻山、数十里に綿亘し、峰巒陡絶たり、惟だ山南に羊腸の一綫あり、僅かに攀登す可し。捻匪の乱、近村多くは家を移して其の上に居し、寨を結び兵を繕えて以て自ら保たんとす。時に境内患を被ること已に久しく、村舎半ば墟にして、又た隆冬に値り、野に掠する所無く、賊往きて山を攻めれば、輒ち炮石に飛撃せられ崖より墜ち死す。相い持すこと六七日にして、將に退かんとす。淄川の賊劉徳配なる者有り、時に亦た莒に入り劫掠す。李成と合して山路を偵知し、成を導き匪衆を分かちて二と為し、伴りて山北を攻め、而して精鋭を山南に伏す。会ま大霧雨雪あり、数武も相い覩ず、山北の賊は旗を展べ角を鳴すも進まず。寨中盡く丁壯を將て婦孺を護らしめ、之を北山に置く、北面の險絶なるを以て、賊突上する能わずと料るなり。詎れぞ賊已に南面由り潜かに登り寨下に逼れるや。守者遑遽して措うを失い、火器俱に雪に浸溼せられ燃す能わず、寨遂に破れ、屠殺せらる算うる無く、号泣山谷を震わし、婦女多く澗に投じて以て殉ず。横尸狼藉は、陰崖幽壑の冰雪に皆な殷たり。賊盡く有る所を掠し、復た西して竄る。」⁴⁸⁾

十二月二日李成らは馬髻山の寨を攻撃した。馬髻山は州城の南東、十字路鎮の北東、大店鎮の東、莒州と日照の境にある。この馬髻山は急峻であり、南側に細い登り道が一本有るだけであった。捻匪の襲来にあたって近隣各村の人々は山の上へと逃げて寨を築き、武器を揃えて防衛にあたった。八月の襲撃以来、長く劫掠を被ったために莒州の村々は半ば廃墟と化していた。また時は真冬となっていたために掠奪できるものは遺されていないだったので、そこで賊は馬髻山を攻めたのである。しかし砲弾や石に撃たれて崖から落ちるだけであった。相い対すること七昼夜攻撃を加えたが攻略できず賊はあきらめて撤退しようとしていた。そこにちょうど淄川の賊劉徳配が、山の抜け道を探知した。彼は李成を導いて部隊を二つに分け、一方に偽って山の北を攻めさせ、精鋭部隊を山の南に配置した。この時深い霧が発生し雨雪が降り数歩先も見えなかった。山の北の賊は旗を振り角笛を鳴らしたが進もうとしない。寨の中では壮丁に女子供を守らせて、これを北の山に置いておいた。山の北の地形が険しいので賊が上ってくることは出来ないだろうと考えたからである。しかしその時すでに賊は寨の真下にまで窺かに迫ってきていたのである。防衛側はおののき対応できず、また火器も雪に濡れて発火せず、寨はついに陥落した。殺された人は数知れず、泣き声が山や谷を震わし、婦女は谷間に身を投げて死に、賊は徹底的に掠奪をしてそのまま西方へと去っていった。

だがこの後、山東省南部における捻匪の活動は終息へと向かった。

「毅宗同治二年、秋九月、僧格林沁捻匪を膠高の間に撃ち、匪南して竄る。僧其の必ず莒に入らんとするを度り、先に勁卒を選びて繞りて其の前に出し、皆な輕弓短箭もて將軍嶺に設伏せしむ。然る後自ら大軍を督して之を驅る。日將に西に沈まんとするに、匪衆嶺下に至る。伏兵起ち、高懸り下を射てば、箭雨集の如く、死傷累積し、伏尸土を見ず、前後截殺斬首するは数千級、余匪連夜走る。詰旦、大霧ありて途に迷い、僧軍追及して、之を城南三十里の土山湖に蹙り、盡く之

を殲す。」⁴⁹⁾

二年後の同治二年（一八六三年）九月、僧格林沁の部隊が山東半島の膠州・高密間で捻匪と戦い、これを敗った。賊は南下して莒州へと逃れたが、僧軍はこれを追いつめて州城南三十里のところにある土山湖で殲滅した。

「同治六年、捻匪任柱頼文洸即墨自り囲みを突いて出で、諸将尾追して莒に入り、城南菜園莊に陣す。賊の勢い甚だ盛んなり。官軍先に馬隊を以て之を衝くも、柱の衆短兵を奮い逆戦し、馬隊大いに挫かれ、歩隊接応するも亦た敗れたり。賊勢いに乗りて城を撲たんとす。渠魁の州南土城の上に登りて軍を指して追攻する有り、一事城防危急たり、守者急ぎ大砲を燃して之を撃つ、竟に其の魁を殲す。賊衆の気奪われ、官軍旗を返して掩殺すれば、始めて囲みを解きて去る。伝え聞くに斃せし者は偽小魯王なりと。時に諸将兜勦の法を用う。賊両路に分かれて東西に竄ぐ。提督劉銘伝西路に截撃し、布政使潘鼎新之を東路に邀え、斬獲すること甚だ多し。賊飢え且つ疲れ、海に沿いて南し走る。銘伝尾追して坪上に至り、奮撃して大いに之を破る。任柱槍傷に中りて馬より墜ち、贛楡に逃入す。病甚だしく、賊將潘貴升之を殺して以て降る。頼文光竄げて揚州に至り、即選道吳毓蘭計りて之を擒え、捻匪平らぎたり。」⁵⁰⁾

同治六年（一八六七年）には、捻匪の首領である任柱と頼文洸が包圍網を突破して、山東半島の即墨から莒州へと逃げ込んだ。官軍の諸将もこれを追尾して莒州に入った。当初は賊軍が優勢で、州城も攻略されそうになったが、賊の首領「偽小魯王」を倒したことで戦局は一変し、賊は敗走して殲滅された。ここで山東省南部での捻匪の活動は終わりを告げた。

以上が莒州をめぐる咸豐四年に始まり同治六年に終息する十数年に及んだ捻匪など匪賊の擾乱の顛末である。咸豐十一年の馬鬣山の戦いが混乱の最大の山場であり、これを境にして賊の活動は急速に沈静化していく。この背景には地域社会に生きる人々がとった対処法、いわば在地防衛の方法の確立があると考えることが出来る。この点についてより詳細に見てみたい。

②在地防衛の方法：「建圩結堡」

“建圩結堡”とは“圩”や“寨”と呼ばれる砦を築くことを意味する。この在地防衛の方法について、『莒志』の「人物伝」の記述、本稿に関係する大店莊氏及びその支派の族人の伝を材料に考察を進めたい。まずは莊銘訓という人物の伝である。

「莊銘訓。字は礼園。……復た捻匪の莒を擾すに値いて、胞叔の徳一を奉じて、葛子澗に避難す。徳一足疾を患い、童僕を率いて躬ら昇きて行く。匪追うこと急なれば、財物を抛擲し、匪の争い取るを誘い、難を免がるを得たり。族人と約して就ち本村に寨を立つ。土を掘りて骸骨を見て、資を捐して夫の席裏を覓めて之を瘞め、均しく暴露するを免れしめ、復た田五畝を捐して義塚を為る。捻匪屢ば擾すも、皆な以て備え有りて患い無きは、銘訓預防の力なり。労を積むを以て卒す、年五十一歳。」⁵¹⁾

莊銘訓は最初は、叔父の徳一とともに葛子澗という山谷の間に逃れた。そこで賊に遭遇したが何とか難を避けることが出来た。後、莊氏族人と協力して大店鎮に「寨」を築いた。捻匪はしばしば攻撃を

加えたけれども、彼の貢献によって人々は災難から逃れることが出来た、とされる。

次に咸豊・同治年間の捻匪の擾乱の中で最大の事件である咸豊十一年秋の馬鬣山の攻防に関わった人々の伝を検討する。莊鵬翥、彦成、彦英の三人は、馬鬣山の麓の沚坊村の人である。この村には、大店莊氏の一支配が居住していた。

「莊鵬翥。字は荊西。沚坊村の人。……。捻匪の莒に竄ぐるや、莒の東に乱山叢疊あり、而して險要は馬鬣を首とす、即ち古えの巨公山なり。山形正方、週四十里、三面皆な峭壁、惟だ南面ののみ人通ず可し。古えの屯兵処有り、即ち此れ皆を立つるに、誠に一夫当関の勢有り。鵬翥族隣を糾合し、砦門を修し、屋宇を建て、器械を繕え、薪糧儲え、戦守具さに備う。賊至り、仰攻すること一次ならざるも、終に遅しくするを得ず。咸豊十一年歳暮に大雨雪あり、氛霾四塞し、咫尺も辨ざる莫し。奸人の賊を導き襲入する有り、鵬翥勢いの危急なるを見て、涕泣して賊を殺さんと誓い、臂を振るい一呼すれば、万衆響應し、声澗谷に殷たり。当時弾火然し難く、惟だ短兵接戦に恃むのみ。鵬翥奮いて身を顧みず、前軀肉薄して、重傷にて立ち殞す。」⁵²⁾

莊鵬翥は、咸豊十一年の災難に際して、険しい地形の馬鬣山に逃れ、族人・村人を結集し砦を構えた。馬鬣山の守りは堅かったのだが、“奸人”の手引きによって賊が砦内部に侵入、前述のような経緯をたどって陥落してしまう。彼は奮戦したけれども結局は戦死する。

「莊彦成。字は立亭。彦英。字は伯才。鵬翥の姪なり。皆な武勇を以て称う。一は雲矛を善くし、一は鉄鞭を善くし、賊と酣戦すること数昼夜たり。砦守らず、彦成衆を督して創傷及び孤露帰る無き者を救護し全活せしむるは甚だ衆し。彦英賊を撃つに飲弾し、僅かに一息を存す。援助隊救いて本山望海峰に往く。一日後に方めて蘇れば、猶お殺賊を奮呼し、季元何くに在りやと問う。季元は城子村の農人なり、棒術に精しく、彦英に随いて賊を撃つに、傷を受け幾んど死なんとす。後に農務に服す能わざるも、猶お孝養に勤め、母を奉じて以て終る。光緒十一年、知州周秉礼彦英に匾額を奨給して曰く勤襄籌濟と。」⁵³⁾

莊彦成と莊彦英は先の莊鵬翥の甥にあたる。両名とも武芸に秀でており馬鬣山にて奮戦、からくも命は取り留めた。この資料からは彦英と共に戦う“農人”の姿が確認できる。この農人が莊氏の下で働いていた傭僕の類なのか、長工なのか、一般的な農民を指すのかは不明である。しかしこの両者は階級として敵対するものであり、平素より虐げられてた農民は捻匪の到来に際して地主に対して立ち上がったのだろうか。賊に呼応した「奸人」は確かに存在するけれども、捻匪への対処という共通の課題に幅広い人々が取り組んでいたと見る方が妥当ではないだろうか。『莒志』の記述による限りは、その人々の中心にあったものは莊氏を代表例とする地主・士紳層であった。

莒州の北部の名族である双鳳山管氏の族人、管廷猷は一九世紀後半の地域の混乱について文章を著している。彼は同治九年（一八七〇年）に挙人となり、光緒九年（一八八三年）に進士科に合格した。咸豊・同治年間の捻匪を中心とした匪賊の襲来は、同時代人としての彼が目撃するところであった。その資料「咸豊南匪擾莒記」⁵⁴⁾は、莒州での捻匪への対応の経緯が詳細に記しており、士紳によって担われた地域防衛の具体例を窺い知ることが出来る。資料はその内容から四段落に分かれており、これまで論じた点と重複する部分もあるが、以下順を追って検討する。

(一)「髮逆金陵に據りて自り、匪氛四もに煽り、江南の徐州捻匪と曰い、兗沂の間棍匪と曰う。

莒の匪を被るは、咸豐四年自り始まり、始め賊千に満たず、大店汀水諸村を劫掠して即ち去る。」
第一段落。太平天国が南京を占拠して以後、匪賊の風潮は四方で活発となった。江南の徐州ではこれを捻匪といい、山東省兗州・沂州ではこれを棍匪といった。莒州が匪賊の害を被ったのは咸豐四年(一八五四年)に始まる。最初は賊は千人に満たず、大店や汀水といった村々を劫掠して去っていった。

(二)「十一年二月、北自り南して掠し、火光百余里に亙り、馬歩約数十万。時に承平日に久しく、民は兵を知らざれば、賊の至れるを聞き、庸懦なる者皆な山谷の間に竄伏し、邑の豪俠、郷兵を練して団を為る者十を以て数う、衆しと雖ども漫りに紀律無く、賊に遇わば奔竄す。敢えて枝梧する莫し。間ま勇敢の士有りて、隊を列して迎撃するも、亦た衆寡敵せざるを以て、敗衄するを免れず。賊至る所に褻脅し、一賊数十人を褻し、之を擔負の厮役と為すは、牧者の羊を驅る然りが若し。其の州城に逼らんとするや、沭河の西、浮来の東、肩を摩り踵を接し、彌望際無く、絡繹として南下し、竟日絶えず。州城堅完にして、州牧の福は門を閉じて守り、附郭俱な焚燬せらるも、賊掠に飽きれば帰えらんとし他の志無く、故に幸いにして全きを獲たり。」

第二段落。十一年二月、捻匪が北から南へ縦断して掠奪を働き、松明の火が百余里にも及び、馬隊と歩兵隊は数十万を数えた。当時平和な時代が長く続いたため、民は兵事を知らず、賊がやって来たのを聞くと、柔弱な者は山や谷の中に身を潜めた。県の豪傑で・兵を訓練して団を作る者が十ほどあったが、多いとはいっても散漫であり紀律が無く、賊に遭遇すると逃げ去って抵抗しようとはしなかった。たまに勇敢な者がいて隊を組んで迎え撃つても、衆寡敵せず、敗北するほか無かった。賊は至る所で脅迫し、一人の賊が数十人を荷担ぎの役目につけた。それはまるで牧者が羊を追うのようであった。賊は州城に迫ろうとして、沭河の西、浮来山の東では肩をすりあいひしめき合いながら見渡す限り続々と南下していき、一日中途絶えることがなかった。州城の守りは堅く、知州の福格は、門を閉ざして守り、城の周りが焼き払われたけれども、賊は掠奪に飽きれば帰ることを考えるだけであったので、幸いにも無事を得たのである。

(三)「是に嗣いで始めて郷団の恃むに足らざるを知り、乃ち各の圩を建て堡を結び、以て身家を衛らんとす。然るに山に寨する者は十の八、村に寨する者は十の二たり。玉皇廟枯涸に困しみ、馬髻山間諜に敗る。時に村圩の成りし者は只だ停溝、大店、張家莊、北杏、北汶の数処有るのみ。之が長と為る者、監生于正修、道員莊瑤、理問職銜張遵筭、候選都司王鳳岡、監生王兆基等、未だ雨せざるに綱繆し、一郷之に頼る。事平ぎ、始めて各の山を棄て村に帰り、村に依りて寨を立て、星羅碁布、四境に徧く、大河以南、長淮以北、至る所皆な然り。」

第三段落。ここで初めて、郷団・民団などの団練が頼みにならない事がわかった。そこで各自が「建圩結堡」して(砦を築いて)、身と家を守ったのである。しかし山に砦を築いた者が八で、村に砦を築いたのは二の割合であった。玉皇廟山は枯涸に困しみ、馬髻山は間諜によって破られてしまった。その時、村に砦を築いたのは、停溝、大店、張家莊、北杏、北汶の数個村のみであった。この長となつたのは、監生の于正修、道員の莊瑤、理問職銜の張遵筭、候選都司の王鳳岡、監生の王兆基等である。何事も起こらぬ内に準備をして備え、郷里は皆これに頼ったのである。この時の賊が平定されてようやくそれぞれが山を棄てて村に帰り、村によって砦を築くこととなった。その様子は星を散りばめたように州域にあまねく広がり、黄河の南、長江と淮河の北はみなこのようであった。

(四)「同治丁卯、髮逆の余孽任柱頼文沆山左を竄擾す。官軍四面より之に蹙り、遁ぐるを得ざら使め、卒いに野に掠する所無きを以て、疲羸し悉く就ち賊俘せらるは、圩堡の力なり。今承平日に久しく、各村の圩堡は半ば就ち圯毀せり。而して当年の衆志城を成し、胼胝して経営し、以て身家を保ちて患難を捍ぐは、其の事没す可からざるなり。故に村寨の名を左に記し、而して堅壁清野論を以て焉に附す。」

第四段落。同治六年（一八六七年）に太平天国の残党の任柱と頼文沆が山東を騒がした時のこと。官軍が四方より迫り逃げ道をふさいでしまい、さらに領域内に掠奪できるものをなくしてしまったために、賊は疲労困憊して捕らえられてしまった。これは「圩」の力である。今日平和なときが続き、村々の圩は半ば崩れ落ちてしまった。しかし当時の人々が城を造り、苦勞して経営し、身と家を守って艱難を防いだということは忘れてはならない。故に村寨の名を左に記し、さらに「堅壁清野論」を付録とする。

この中で第二段落と第三段落の記述は重要である。咸豐十一年の襲来に直面して、民兵組織は規律もなく敵にかなわなかった。地域社会の人々は、山や谷間に身を隠し「寨」（砦）を築いて難を逃れようとした。だがこのような山寨は多くが賊に破られて全うできなかった。一方で数は少なかったが州の郷紳たちが主導して作った村の砦「村圩」「村寨」があった。莒州には合計一二の圩が建設されたという⁵⁵⁾。著者の管廷猷はこの村圩に在地防衛の積極的価値を見出している。『山東近代史資料』に載せられている捻軍関係資料の中に、一九五〇年代に実施された捻軍の襲来経験者との座談会記録がある⁵⁶⁾。これによると、圩の形状は土をもり立てて造った上部が狭くて下部が寛い、坂状の土手であり、下には溝を掘って水を蓄え、敵が容易に侵入できないようにしたものである。主に大地主や中規模の地主によって建設されたとされる。

圩を築いて匪賊に対抗しようとする作戦は莒州に限られたものではない。捻匪の襲来を受けた地域のそれぞれが「圩」を築いて防衛にあたったことは知られている。同治四年（一八六五）年以降、捻匪対策にあたった曾國藩はこの「圩」について以下のような方法を探っていたとされる。些か後の時期の記述となるけれども、その内容は参考になるだろう。曾國藩に従っていた王定安の遺した「求闕齋弟子記」⁵⁷⁾に依れば、圩を守り賊を防ぐには、四つの行うべき事、堅壁清野、分良莠（良民と悪人とを分ける）、発給執照（許可証・身分証の発行）、詢訪英賢（地方の賢人を捜し求める）がある。この内、第一の「堅壁清野」が中心となるものであり、大略以下のように実施された。捻匪の擾乱は多年にわたり、およそ江蘇、安徽、山東、河南の要衝にある県では皆な圩寨を建設し自らの身を守っている。塹を高くして堀を深くすること、これが堅壁である。あらゆる人と物資を圩の中に入れてしまうこと、これが清野である。そうすると賊は掠奪する事が出来なくなる。万一圩が攻撃を受けても、近ければ三日で、遠ければ半月で援軍を差し向けることが出来る、というものである。

この「堅壁清野」という方法は、莒州においてどのように実施されたのだろうか。先ほどの管廷猷の著した「咸豐南匪擾莒記」に附されている「堅壁清野論」を見てみることにしよう。

「論に曰う、兵を用うるに法有り、流寇を制するに法無し、何ぞや。両軍対壘すれば、勝負は一戦に決す。流寇は然らず、行蹤は飄忽とし、東す可く西す可く、勝てば則ち臨張し、敗れば則ち鼠竄し、沿途に裹脅し、旋いで復た軍を成す。明の宗社、張李に亡さる有り、洵に畏るに足る

かな。之を禦ぐの法、堅壁清野に如くは莫し。堅壁清野の法は、民をして寨を結び自ら衛ら使むるに在り。寨を結ぶは村を宜しとし山を宜しとせず。村寨に六便有り。移徙の勞無く、室廬の墟を免がるは、便の一なり。村を連ね共に保つに、人皆素より習い、稽察に易し、便の二なり。糜粟井泉、取給して竭きず、便の三なり。互相に犄角するに、声勢連絡す、便の四なり。守禦の暇に、耕耨するを妨げず、便の五なり。寨は必ず多く礮台を置く、其の中を空とし、孔を三面に留め、轟撃すれば虚発する無し、便の六なり。然るに又た七難有り。寨を立つるに必ず股実形勢の区を擇ぶに、各村畛域を存つを意い、肯えて協力せず、一の難なり。寨に必ず長有り、烏合の衆、統馭に帰せず、二の難なり。地狭く人稠く、蜂房密布し、臭穢薰蒸すれば、癘疫生じ易し、三の難なり。地曠く人稀れ、防禦に敷かず、四の難なり。主者庸懦なれば、則ち号令不一なり、強有力者、或いは妄りに威福を作し、郷鄰を魚肉とすれば、則ち人心服せず、五の難なり。賊警を虚聞し、動もすれば輒ち驚擾す、其の屢ば至れるに及ばば、又た玩忽し易し、六の難なり。富者財を吝しみ、避匿を以て計と為せば、灰燼の余、版築の資無し、七の難なり。此の六便を知り、七難を除去すれば、結寨の法備われり。乾嘉の際、之を川陝に行いて、而して教匪定まるに底る。咸同の間、之を山左に行いて、而して任、頼をして授首せしむ。然れば則ち結寨自衛に非れば、以て堅壁清野する無く、堅壁清野に非れば、以て流寇を制する無し、法固より此を踰ゆる無きかな。敢えて以て之を兵を知る者に質す。」⁵⁸⁾

論に言う。軍を用いるには手本があるが、流賊をおさえるには手本がない、何故か。両軍が対峙すれば勝敗は一戦で決するが、流賊はそうではなく、行方が定かではなく自由に東西に動き、勝てば勢い盛んとなり負ければこそこそと隠れてしまい、途中で人々をかり集め再び軍を整えてしまう。明朝は張獻忠・李自成に滅ぼされてしまった。まことに恐るべきものである。流寇に対処するには堅壁清野が最上の方法である。堅壁清野とは民に寨を結ばせて、自ら防衛にあたらせることである。寨を結ぶのは村が良くて山は良くない。(以下、村寨の六つの利点と七つの難点について述べられているが後述。)この六つの利点を知り、七つの難点を除去できれば、寨を結ぶ方法は完備したようなものだ。乾隆・嘉慶年間にはこれを四川省と陝西省で行って、白蓮教徒の反乱を鎮めた。咸豊・同治年間にはこれを山東省に実施して、捻匪の首領の任柱と頼文洸を鎮圧できた。すなわち、寨を結んで自衛するのでなければ堅壁清野は出来ないし、堅壁清野でなければ流寇を押さえることは出来ないのである。

村寨を結ぶにあたって六つの利点と七つの難点があるとされるが、後者においては人々を結集させるリーダーの必要性、人々を統御する困難さ、リーダーに求められる規律に重点をおいているのは興味深い。『莒志』に載せられたこの資料は、莒州の名族で自らも捻匪の襲来に遭遇した地主の手によるものである。それ故に自らの視点に立った見解が強く出ており、必ずしも地域の動向を正確に反映したものであるとは言えない。しかし捻匪の襲撃に際して、山や谷に難を避けた者がいる一方で、居住する村落に「圩」「寨」を築いた者がいたという事は指摘できよう。後者について言うならば土を積み上げて土手を造り、溝を掘り下げて堀を造り、村民を動員結集させて防衛にあたるには、資金のみならずそれを可能とするリーダーシップが必要となる。この中心となった者が莊氏族人などの在地有力者、士紳であった。ここで節を改めて地域社会における彼らの実態、あるいはあるべき姿を論じる。

おわりに：地域社会と地主

この村圩の建設と防衛において在地有力者である士紳の果たした役割は大きい。その具体例を再び荘氏族人たちの「人物伝」より概観する。まずは先の管廷猷「咸豊南匪擾莒記」にも村圩の長として名前が登場する荘瑤とその子供たちの事績である。この荘瑤とその三男の錫績は、先述した一九四四年五月の鬪争大会で批判され後に処刑された悪覇地主の荘英甫の祖父と父親にあたる。「罪惡史」では彼らもまた批判の対象に挙げられている。荘瑤は嘉慶年間に連続して挙人、進士に合格した。

「荘瑤。字は琪園。嘉慶丙子科順天挙人、丁丑聯捷して進士と成る。工部都水司主事に任ぜらる。積弊を剔釐し、吏敢えて欺かず。升りて郎中を補す。道光二十年、湖北荆宜施道を簡授せられ、旋いで河南彰懷衛道に調せらる。……卒いに抗直を以て屢ば当道に忤い、病と称して組を解き帰り、家居して急公勸義す。後進を誘掖するを以て榮と為し、手に式古編を輯し、復た張勤愨公の課子隨筆を校し、次第刊行し、莒人の矜式と為す。咸豊十一年、旨を奉じて籍に在りて団聯を辦ず。同治四年卒す。……。」⁵⁹⁾

彼は嘉慶・道光年間に各地の地方官を歴任した後故郷へ隠退、そこで咸豊十一年の捻匪の襲来に遭遇した。彼は命令を受けて団練を編成し地域防衛にあたったという。彼とともに大店鎮防衛に携わったのがその三男錫績と四男錫経である。

「三子錫績、咸豊辛酉の拔貢、援例にて内閣中書と為り、同知を以て江蘇に分発せられ、海運を委辦す。押運監兌、五年を歴て纖毫の誤りも無し。四品を奨され、知府を以て用いらる。又た宜荆釐局を辦理す。局属七卡、司事者税課を侵蝕し、商民を需索し、弊端百出す。錫績時に小舟を權して、嚴密に巡察し、卡丁を約束して、上下商船、復た留難無し。商民感頌す。」

「季子錫経、字は捍庚。邑の廩生。咸同の間莒に寇患多く、陳玉標前に掠し、捻匪之に繼ぐ。人民東西に奔避し、定まる所有らず。父の瑤既に督辦郷団の旨を奉じ、乃ち兄の錫績と共に族老と約し村圩を修すを議し、堅壁清野の計を為りて、議甫めて定まりたり。困難蠱起するも動かされず、刻日工を興し、凡そ田宅を捐し、材料を庀うるは、皆な己を先にし人を後にす。事に遇いて能く断じ、工頼りて以て成り、復た子葉を籌備し、丁壯を選練す。同治二三年、連寇屢ば至るも、守禦方有り、闌堵警無し。寇平ぐの後、二十余年に迄りて、宵小迹を斂め、猶お其の威望に服すと云う。」⁶⁰⁾

彼ら二人とも郷試に合格はしていない。四男の錫経の伝を中心にみれば、父の荘瑤は旨を奉じて団練の編成にあたり、これに錫績と錫経も協力することとなる。彼らは荘氏の族人とともに村圩の建設に着手し、先述した堅壁清野を防衛の策とした。建設に際しては財産を提供し村民の中で率先して事に当たった。また弾薬を予め準備し壯丁を選定し訓練を施した。結果、同治二、三年に匪賊がしばしば襲撃したけれども守り抜くことが出来た。その後二十年余りも盗賊たちはなりをひそめたのであった。この記述は、些か脚色があるとは思われるが、地域における士紳の理想が表現されていると言えよう。彼らの行動は、後に共産党によって称揚された「開明地主」としての士紳の行動と同じ精神に基づくものであったのかもしれない。いささか旧中国の地主への弁護が過ぎるかもしれないが、財産の集積

を続ける地主であっても、それだけではなく地域社会の問題に積極的に関わらねばならない、或いは関わりたいという指向性があった事は否定できない。

この地主のあるべき姿がより明確に記されている人物の伝を見る。莊余珍は咸豐年間の地域社会の混乱の最中の咸豐九年(一八五九年)に誕生し、一九三五年に逝去した。

「莊余珍。字は希堂。世よ大店鎮に居す。幼くして学に勤め、長じて方に通じ、觀風試第一を以て、学使汪鳴鑾に受知せられ、乙酉科拔貢に擢せられ、内閣中書職に就く。孀母堂に在り、告歸し侍養せんとし、遂いに仕進を絶意す。本鎮圩局に長たること十年を数え、石堡を増築し、碉樓を補建し、團勇を編練し、今に至るに屹然として莒南の重鎮為り。光緒十八年、城西孟家村の郷民、土を掘りて漢安租界碑を得たり、業に外賈に售り、將に運びて境を出でんとするに、余珍之を聞き、重価にて本県に購回し、古蹟頼りて以て保存す。三十年、清科挙を廃して学校を設けんとするも、民間積習に狃れ、多く觀望して就かざれば、余珍朱陳店中学を創立し、風氣の先を開く、是れ莒邑教育改進の始め為り。宣統元年、県議会議長と為る。三年山東諮議局議員に充り、撫署審査会委員を兼ね、東省の財政に於いて、釐剔する所多し。是の冬共和を宣布す、各県に電令し勇百名を練し、以て保衛に資せしめんとす。莒境南北を綰轂し、防務尤も重要に関われば、乃ち省垣由り槍枝を講い莒に運び、城守既にして完きにして、郷團亦た成立す。民国三年、県議会議長に充る。復た議長に充る。地方の利弊、銳意興革す。常平倉の穀、年久しくして朽腐し、食う可からざれば、陳を出し新に易うるを倡議して、穀を以て錢に易え、錢を以て穀に易え、循環周轉し、穀に朽腐無く、而して存款已に巨万に達す。七年、天津に水災あり、勸捐總董に充り、母に代わりて金五百元を捐す。又た山東義賑案の内に於いて、五千元を経募し、均しく政府の褒獎を蒙る。十年、邑紳德行優異を以て、実を臚えて上聞し、復た慈孝延麻匾額を授せらる。是より先本県同仁善会を成立し、旋棺掩骼に、余珍賦地七畝余を捐して義田と作す。又た大店自り莒城に至る南北通衢為れば、独り巨資を出し、橋梁を建修し、道路を平治し、今に至るも之に頼る。難を排し紛を解き屢ば人を危急存亡の際より拯うに至りては、更に数を悉くす可からざるなり。民国二十四年卒す。年七十有六。」⁶¹⁾

莊余珍は官途につくことを諦め、母に仕えることを理由に故郷へ帰り、大店鎮で圩長を十年つとめた。石壁を増築し望樓を補修し、團勇を編成・訓練した。文化・教育方面への関心も高く、地域の文化財の保護に尽力した。光緒三十年に科挙が廃止されてからは、朱珍店中学を創設するなど地域の教育環境の整備に努めた。この中学校はほどなく閉鎖されるが⁶²⁾、彼のように莒州での教育の普及につとめた莊氏の族人は少なくない。民国から中華人民共和国にかけて、数名の名前があがっている。例えば光緒年間の挙人莊厚澤という人物は宣統年間に勸学所総董、民国年間には教育局局長に任ぜられた⁶³⁾。莊余珍に話を戻すと、彼は同じ頃清末の莒州や山東省における地方自治に積極的に取り組んだ。宣統元年には莒県議会議長の議長に任命され、続いて宣統三年には山東諮議局議員となった。民国初年ごろには莒州の保衛、郷團の編成につとめた。さらに民国三年には県議会議長改選時にはその議長に再選された。地方の公事、慈善事業、例えば橋梁の補修や道路の修築、貧窮・災民救済への募金に積極的にかわり、その他の様々な善行については数えることが出来ないとされる。

続いて莊余珍の子の莊英の伝を検討する。

「子英。字は仲華。天姿明敏にして、弱冠にして諸生を補す。民国初元に北京法政学堂卒業す。山東高等検察庁検察官、濟寧地方検察庁庭長、江西贛南高等検察分庁庭長を歴任し、至る所平を称す。山東第二屆省議會成立するに、議員に当選し、地方人民殷殷として興革を以て相い属望す。時に濮陽河道已に徙り、工久しく停まり、而るに附捐を徴すること故の如くすれば、英倡議力請し、始めて豁免せらる。欧戦終わり、政府議して日本に向して借款し、抵つるに山東路礦を以てせんとす。英、此れ山東を割棄するの漸なりと曰い、乃ち建議して代表を選派し、京に赴き請願せんとす。英其の事に預かり、聯合呼籲す。南北和に応じ、政府氣沮ぎて、議始めて寝む。民国八年、魯案簽約の先に、挙国力争し、英奔走し尤も力む。青島接收の後、水道事務所所長に任せられ、廠内機工、旧と竄敷多く、一意に整頓し、力めて拡充を謀り、添いて白沙河新井を開けば、水量給足し、市民便を称す。民国十六七年間、国軍北伐し、北軍敗退し、各方の軍隊、往来過境すれば、供応日に暇給あらず。劉桂堂初め撫を受け、莒城に次り編練を待ち、大店鎮に分駐す。軍紀律鮮なく、時に反側を虞れ、人人自ら危ぶむ。英時に家居し、鎮の団事を主るに、委曲調劑、地方頼りて以て保全す。英事に任ずるに勇にして、險難を避けず、積勞を以て疾を致し、余珍に先んじて卒す。年四十五、邑人今に至るも之を称め、其の未だ施す所竟えざるを惜しむと云う。⁶⁴⁾」

莊英は、民国元年に北京法政学堂を卒業後、検察庁の職を歴任した。後に山東第二期省議會議員に当選した。第一次大戦後に北洋政府が山東の鉄道と鉅山を担保に日本に借款を申し込んだ時にはそれに反対し、民国十六～十七年に北伐が当地域に波及した時には南北それぞれの軍隊との折衝にあたった。『莒志』の記述によれば、この間を含む民国十四年から二三年までは軍閥軍がしばしば本県を往来し駐留している⁶⁵⁾。軍閥混戦の中で地域社会の問題となったのはその軍隊の現地給養と掠奪に対処することであり、地方の士紳がこの任にあたったという記載は珍しくない。莊英はこの中で地域に及ぶ被害を最小限に留めようと試みた、とされる。

以上の内容を簡単にまとめておこう。共産党が到来する前の莒州大店鎮に居住する莊氏は、清代を通じて土地を集積し少なからぬ族人を科挙に合格させている。十九世紀の清代後半には莒州の名族へと成長を遂げていた。一八五〇～六〇年代咸豐・同治年間の捻匪による擾乱は、地域社会に生きる地主と一般農民とを問わずともに対処すべき課題であったと考えられる。この捻匪に対する地域の防衛において、地主・士紳の担った主導的役割は看過できない。地方志の記述は士紳の行動を過度に称揚する傾向にあるので、この点は割り引いて考えねばならない。しかし自らの財産を守り安全を確保することから出発したものであったとしても、地域社会の危機に際して人々を結集させたことは否定できない。この背景として第一に捻匪による無差別の攻撃が人々の恐怖をかき立てた事、第二に地主による村民に対する経済的・政治的強制、その見返りとしての現実的な利益があった事を想定できよう。しかしこれだけにとどまらず、第三には、地主・士紳が社会の結節点としての中心的な立場にあり、威厳や名望をもって人々に向き合っていた、という地域社会の秩序のあり方が要因として考えられよう。地主は大土地所有、そこからの生産物の五割にも及ぶ高率の小作料収益を基盤として、更に土地を集積し、科挙合格者を排出していった。この地域は、山東省の比較的遅れた地域であり地主による個々の農民に対する人身的支配が強固に残存している地域であるとされる。佃戸からの過度の収奪、

額外徴集、労働の強制は些か強調されてすぎているとはいえ事実であろう。この点に立脚すれば地主と農民の間には緊張した対立関係が見いだせる。しかしながら一方で、一部の地主は地域社会の課題に対して積極的に関わり、そこに生きる人々の中での名望を獲得しようとする性格、冒頭で述べた森正夫氏の論考にある“経世済民”型の志向をあわせもっていたことも看取出来る。ここで見た莊瑤父子、莊余珍父子の伝にあるように、地主が中心となって地域社会の公事や善行に携わることで、そこに生きる人々は彼に対して尊敬の念を抱き納得してこれに従うこととなる。生産関係において地主と農民との対立は自明のことであっても、この両者は果たして常に対立するものであったのか、という疑問のもとで筆者は本稿の作業を進めた。経済的に不利な立場にあったとしても、それが“納得できる”秩序のもとに組み込まれているならば対立の先鋭化は生じ得ない。地主・士紳を基軸として取り結ばれていた従来の社会関係においては、彼らによる地域社会の支配は当然のこととして矛盾無く受け入れられてきた、と考える方が妥当であろう。

例えば「総結」は莊氏に対する闘争開始後の各階層の動向を分析しつつ、“開明的”と分類されたある莊氏族(恐らく小地主)の次のようなコメントを載せている。「今日みんなが闘争するのは正しい事だ。人は地主であれば即闘争するのではない。莊景樓は一生の間道理に合う事をやってこなかった、人は何で彼を闘争にかけないことがあろうか。四余堂は真面目な人だ、人は何で闘争しないのか。誰かに土地があれば即その人を闘争にかけるというものではないのだ。」⁶⁰ 残念ながら四余堂の土地所有・経営規模は不明だが、その四四年の闘争直前直後の視点に立てば、人々にとって問題になるのは土地所有ではなく、過去における道理にもとる行動の有無であった。

会門を巡る地主と農民の関係はより象徴的である。会門とは民間宗教組織の一種である。莒南県には安清幫、大刀会、聖賢道、九官道などの組織が存在した⁶¹。この中の安清幫、俗称“三番子”は青幫系に属しており、一九四一年にその他の会門組織に先駆けて取り締まりを受けた。莒南県でのその頭目は莊英甫であり、莊氏に対する攻撃の中で会門批判は大きな位置を占めた。「総結」によれば、会門は迷信によって群衆を惑わし、貧民の階級意識をばかし、搾取関係を糊塗し、地主の封建的支配を強化するものだったと評価されている⁶²。一九四四年五月の闘争大会では“だまされていた”農民による告発が次々と会門と莊英甫に向けられるという場面があった。しかしこの共産党による攻撃は一方向的であり、何故会門が地域社会に受け入れられていたのか明らかではない。この点、一九三八年の劉少奇の分析が興味深い。彼は「堅持華北抗戦中の武装部隊」という論文にて、紅槍会、天門会、聯莊会など宗教的色合いの濃い武装組織の性格と対処法を述べている⁶³。「……………彼らの領袖は大多数が豪紳であるが、農民の遅れた狭小な自己の利益に迎合するので、非常に強固に団結することが出来、迷信は農民を団結させる一種の方法なのである。(聯莊会は迷信がないので比較的よい。)彼らは一切の問題に対して自らの利益から出発し、誰かが彼らを騷擾し掠奪すれば、彼らはそれに対して反対し、解決をしようとする。それが日本軍、偽軍、抗日軍隊或いは政府、土匪、如何なる党派であるかは関係ない。」この一文は、地域社会の農民が会門に参加していく理由、並びに会門にとって村落外部の権力や軍隊がいかなるものであったかを端的に表現している。同時に、士紳がこの組織の中心にあって、人々がそれを受け入れている状況を窺い知ることが出来る。

盧溝橋事件勃発後、一九三八年に日本軍は山東省南東部への攻撃を開始した。ほぼ同時期に共産党

も遊撃隊を組織するなどしてこの地域への浸透を図った。結果、一九四三年まで旧莒州の領域は、日本軍、国民党軍、共産党軍の三者が対峙する状況下に置かれた。前稿でも述べたように共産党は、「押し（打）」と「引き（拉）」を使い分けることで、地域社会の住民を自らの側に引き寄せる試みをする。だが軍事的緊張の中では、地域社会に置いて主導的立場にある地主を相手側に追いやる可能性があるために過度の圧迫を加えることはしていない。共産党側に協力せぬまでも、せめて反共側にまわらぬようにすることを目的として、政策的には妥協をする傾向にあった。戦況の好転に伴い、地域において共産党に対抗できる勢力が弱化した一九四三年末以降、地主層への圧迫が強化される。荘氏がその対象となるのは四四年になってからの事である。同年五月の鬪争大会は荘英甫たち悪覇地主の打倒を目的として二回開催された。旧債の清算などの形式で土地を没収して経済的に打撃を与えるだけでなく、地域社会における地主の政治的立場を破壊したことは注目し得る。共産党は抗日戦争と内戦を戦い抜く過程で、対外的に閉鎖した根拠地の中で強固な動員体制を確立していかねばならない。一般農民に対する締め付けの強化は些か後のこととなろうが、地主を基軸に形成されていた既存の秩序は、共産党にとっては対決を避けて通ることの出来ないものであり、これを開明地主として内部に取り込むか、或いはそれが不可能であるならば完全に排除してしまわねばならなかったのである。

註

-
- 1) マーク・セルデン『延安革命』筑摩書房、一九七六年。
 - 2) ヒントン『翻身』平凡社、一九七二年。
 - 3) 同上書、第一巻、三七―三八頁。
 - 4) 何高潮『地主・農民・共産党』牛津大学出版社（香港）、一九九七年。
 - 5) 田中恭子『土地と権力』名古屋大学出版会、一九九六年。
 - 6) 「抗日戦争期中国共産党による地域支配の浸透：山東省南部莒南県」『名古屋大学東洋史研究報告』二五号、二〇〇一年。
 - 7) 馬場毅『近代中国華北民衆と紅槍会』汲古書院、二〇〇一年。
 - 8) 同上書、序章。
 - 9) 同上書、第四章、二二六頁の引用する朱其華「一九二五―二七年中国大革命に於ける農民運動（下）」『滿鉄支那月誌』九―二、一九三二年。
 - 10) 同上書、第六章。
 - 11) 森正夫「明代の郷紳：士大夫と地域社会との関連についての覚書」『名古屋大学文学部研究論集』七七、史学二六、一九八〇年）など。なお、森正夫氏の研究史整理は吉尾寛「戦後日本の明清史研究における土地所有より地域社会への道程」『名古屋大学東洋史研究報告』二五、二〇〇一年を参照。
 - 12) 莊陔蘭總纂、民国二十五年『重修莒志』。以下『莒志』と略記。
 - 13) 注十四の『県志』「大事記」十二頁。
 - 14) 山東省莒南県地方史志編纂委員会『莒南県志』齊魯出版社、一九九八年。以下『県志』と略記。
 - 15) 『県志』「大事記」十五頁。
 - 16) 『山東省地図冊』山東省地図出版社、一九八八年。

- 17) 「此三者(※工・商・農)莒有一焉、曰農而已矣。非無工、農而工也。非無商、農而商也。釀秫為酒、榨豆為油、皆即農產物製造之。冶者陶者梓者輪者織者染者、只以供農村之用、分廬列肆、行商坐賈、皆農家者流也。業工商必兼農、不歸農則敗其業。農豐則工惠而商贏、農歉則工坐食商仰屋矣。……。」『重修莒志』卷三十八「民社志・工商業」。
- 18) 景甦・羅崙『清代山東經營地主底社会性質』山東人民出版社、一九五九年、「光緒朝山東四六縣一三一家經營地主經濟風貌一覽表」。
- 19) 拙稿「清末民国期山東省における農家經營と労働力移動」『名古屋大学東洋史研究報告』二二、一九九八年。「一九四〇年代山東省南部抗日根據地の土地改革と農村經濟」『アジア經濟』三九-一十一、一九九八年。
- 20) 前掲景甦・羅崙、第二章「清代山東經營地主經濟的發展狀況」。
- 21) 天野元之助『支那農業經濟論』改造社、一九三九年(復刻版『中国農業經濟論』不二出版、一九八四年)第一卷、第二章「階級構成」第五節「土地の零細耕作」。
- 22) 李穉「山東農村觀感:紀莒縣之行」『天津益世報』一九三四年四月二一日、二八日。
- 23) 邵履均「山東莒縣邵泉鄉社会狀況調查」『村治』二-一、一九三〇年。
- 24) 「……而莊氏譜牒、謂相伝原籍江南海十八村、明洪武初年来莒朱陳店(※大店)、而證之正徳六年興福禪院之鐘、名列三代、其奉為始祖瑜者、次居第二代第二名、可知以前尚有數代。特旧譜幾於明季兵燹、無可考證。本県外県莊氏不同譜者、亦未敢妄為敘列、故譜曰朱陳店莊氏族譜、始祖瑜。二世分五支。……。今伝至十九世、始祖塋祠、俱在大店鎮、祭田六畝、坐落大店西湖大橋。」『莒志』卷四十一「民社志・氏族下」。
- 25) 莒南県地名委員会編『山東省莒南県地名志』内部資料、一九八四年。
- 26) 「莊謙。……。万曆戊子举於鄉、己未成進士。授汝寧府推官、執法無私、以卓異行取晋浙江道監察御史、出按陝西、平反疑獄、剔弊除奸、課最為天下第一。晚年恬於仕進、退居林下、督子弟力学。莊氏自明初遷莒、世業農、以讀書起家自謙始。」『莒志』卷六十三「文獻志・人物・莊謙」。
- 27) 内、莊永齡(順治)、莊瑤(嘉慶)、莊陔蘭(光緒)は举人と進士の両方に合格している。莊瑤については後述。
- 28) 『莒志』三十二卷「經世志・教育」。
- 29) 中共中央山東分局調查研究室「莒南県三區区十一個村的調查」(華東農村經濟資料第五・六分冊『山東省華東大中城市郊区農村調查』一九五二年所収)、以下「莒南県」と略記。
- 30) 「莒南県」三四頁。
- 31) 莒南県委「大店査滅闘争總結」『闘争生活』増刊、四四年十月(『山東革命歴史档案資料選編』第十三卷、山東人民出版社、一九八三年所収)、以下「總結」と略記。
- 32) 「總結」一二三頁。
- 33) 中共莒南県委辦公室「大店“莊閻王”罪惡史」『文史哲』一九六五-四。以下「罪惡史」と略記。
- 34) 復旦大学歴史系・上海師範大学歴史系著、野原四郎・小島晋次訳『中国近代史 一』三省堂、一九八一年、四〇七頁、註七。
- 35) 「莒自清咸同以後、久無兵事、偶爾土匪竊発、旋就捕滅、間有明火劫案、官民震駭、以為巨変。蓋民不知兵者久矣。……。」『莒志』卷三十五「經世志・軍事」。
- 36) 前掲復旦大学歴史系・上海師範大学歴史系など。
- 37) 許權「清代山東的家庭規模与結構」『清史研究通訊』一九八七-四。
- 38) 管廷献「咸豐南匪擾莒記」『莒志』卷五十四「芸文」。後に再掲。
- 39) 「(咸豐)甲寅、四年春二月十六日、南匪陳玉標寇朱陳店汀水良店等処、殺數十人、擄掠一空。州城戒嚴。」「(咸豐)十年秋、蝻生遍野、秋九月二十三日、捻匪寇汀水葛溝。州城戒嚴。南匪又自日照竄擾莒州、安東衛千総郝元傑擊却之。」「(咸豐)十一年、捻匪自北南掠。二月二十九日入州境、三十日次州城、次日南下。火光亙百余里、焚掠殺傷無算。秋八月初二日、捻匪自東南入境。文武官弁、嬰城固守、鄉兵各主山寨村圩自保。兩月之間、南北梭織、往返九次、所至焚掠、村居廬舍、蕩然無存。初三日破沙溝、又攻硯台山不克、初七日困玉皇廟寨、破之。九月初八日、賊自北而南、僧格林沁追及於州東北九十里之將軍嶺、斃賊數千。初九

日大霧迷漫，又追及於城西南土山湖，殲賊殆盡。冬十二月二十二日，擒匪李成等，突至馬鬣山，困困七晝夜，圩破，人死無算，馬賊四掠，北至屋樓山，鄉間被禍尤烈，州城戒嚴。」「壬戌，穆宗同治元年春正月二十六日，賊棄馬鬣山，由小湖一帶西撲沂水界。」「丁卯六年夏五月，髮逆賴汶光北竄，由浮來西越膠陵闖登萊。夏六月十一日，有兵過境，北赴登萊追賊。十八日，山東巡撫丁葆·統兵至境。秋七月初五日，賊自即墨墨濱圍南竄，諸軍追討，南而復北。八月十一日，由沂水境越浮來山而東，申刻至大湖，遇兵追至南土城，逼近城廂。城上西南角開大砲，斃一賊目，賊竄而南。自此南北互竄，不計其數，多由諸城日照一帶，沿海而行，州之北境未被其害。官軍之道於此者則數月不絕。九月，提督劉銘傳擊之於嶺榆城下，降將潘貴升刺任柱，柱中槍死。十二月賊由日照南竄，殘敗僅千余名，西循集鹿山渡六塘河，揚州淮軍即選道吳毓蘭誘汶光生擒之，賊平。」『莒志』卷二「大事記中」。

40) 「文宗咸豐四年。塩臬陳玉標，聚衆千余，自海州竄入莒境。州城戒嚴，把總黃某馳至朱陳店防堵。臨時募民兵，倉卒應敵，賊至勢盛，民兵氣奪，鋒甫交即潰，黃不能制止，隻身逃匿。賊呼嘯入村，大肆焚掠，復寇良店汀水等村，所至十室九空。安東衛參將郝上庠聞警，急率莒日兩縣鄉勇進剿之，邀擊於馬鬣山下。連戰皆捷。玉標東竄，上庠追及碑廊鎮，又大破之。」『莒志』卷三十四「經世志·軍事」。

41) 「咸豐十年。捻匪焚掠嶺榆，竄擾日照莒州。鄉民四逃，全境震恐。安東衛千總郝元傑，率莒日鄉勇禦之。戰於界牌嶺，互有勝負。時日紳丁守存在精辦團練，犖砲詣元傑，合力以拒。再戰匪方布陣，元傑驟以巨砲轟之，匪大挫遂退。」『莒志』卷三十四「經世志·軍事」。

42) 「咸豐十一年。捻匪寇山東，於膠澳間戰不利，由管帥竄入州境，沿途劫掠，旋南退。

秋復由南大至，州城掩屯，村民各相聚結寨自保。匪首李成以州城堅峻，仰攻不易，焚附郭廬舍以示威。比閭沙溝山寨避亂者頗有富室，圍攻破之，肆行殺戮，尸積如阜，並焚其寨。時嶧賊滕化光，亦率徒千余犯莒，警耗四至，城防民寨，各自為謀，不相救援，賊故得逞。更乘勝攻硯台山民寨，垂克。有申三奎者，斃火銃斃數賊，賊仍進攻，三奎投巨石又斃其三，寨中人胆少壯，連聲喊殺。於是火器齊鳴，木石交擲。會大風雨，山洪爆發，賊勢不支，解圍去。復北攻玉皇廟民寨，山無水，圍攻三晝夜，人多渴死，寨遂不守，噍類無遺。

治南馬鬣山，綿亘數十里，峰巒陡絕，惟山南羊腸一綫，僅可攀登。捻匪之亂，近村多移家居其上，結寨繕兵以自保。時境內被患已久，村舍半墟，又值隆冬，野無所掠。賊往攻山，輒為炮石飛擊墜崖死，相持六七日，將退矣。有淄川賊劉德配者，時亦入莒劫掠。與李成合，偵知山路，導成分匪衆為二，佯攻山北，而伏精銳於山南。會大霧雨雪，數武不相覩，山北之賊展旗鳴角而不進。寨中盡將丁壯護婦孺，置之北山，以北面險絕，料賊不能突上也。詎賊已由南面潛登逼寨下。守者遑遑失措，火器俱為雪浸溼不能燃，寨遂破，屠殺無算，号泣震山谷，婦女多投澗以殉。橫尸狼藉，陰崖幽壑，冰雪皆殷。賊盡掠所有，復西竄。」『莒志』卷三十四「經世志·軍事」。

43) 註三九參照。

44) 同上。

45) 註四二參照。

46) 同上。

47) 註三九參照。

48) 註四二參照。

49) 「毅宗同治二年，秋九月，僧格林沁擊捻匪於膠高間，匪南竄。僧度其必入莒，先選勁卒繞出其前，皆輕弓短箭，設伏於將軍嶺，然後自督大軍蹙之。日將沈西，匪衆至嶺下。伏兵起，憑高下射，箭如雨集，死傷累積，伏尸不見土，前後截殺，斬首數千級，余匪連夜走。詰旦，大霧迷途，僧軍追及，蹙之於城南三十里之土山湖，盡殲之。」『莒志』卷三十四「經世志·軍事」。

50) 「同治六年，捻匪任柱賴文洸自即墨突圍出，諸將尾追入莒，陣於城南菜園莊。賊勢甚盛。官軍先以馬隊衝之，柱衆奮短兵逆戰，馬隊大挫，步隊接應亦敗。賊乘勢撲城，有寨魁登州南土城上，指軍進攻，一事城防危急，守者急燃大砲擊之，竟殲其魁，賊衆氣奪，官軍返旗掩殺，始解圍而去。云聞斃者偽小魯王也。時諸將用兜勦之法，賊分兩路東西竄，提督劉銘傳截擊於西路，布政使潘鼎新邀之於東路，斬獲甚多。賊飢且疲，沿海南走。銘傳尾追至坪上，奮擊大破之。任柱中槍傷墜馬，逃入嶺榆，病甚，賊將潘貴

升殺之以降。頼文光竄至揚州、即選道吳毓蘭計擒之、擒匪平。』『莒志』卷三十四「經世志・軍事」。

- 51) 「莊銘訓。字礼園。……復值捻匪擾莒、奉胞叔德一、避難葛子潤。德一患足疾、率童僕躬舁而行。匪追急、拋擲財物、誘匪爭取、得免於難。約族人就本村立寨、掘土見骸骨、捐資覓夫席裏瘞之、均免暴露、復捐田五畝為義塚。捻匪屢擾、皆以有備無患、銘訓預防之力也。以積勞卒、年五十一歲。』『莒志』卷六十四「文獻志・人物・莊銘訓」。
- 52) 「莊鷗翥。字荆西。泚坊村人。……擒匪之竄莒也、莒東乱山叢疊、而險要首馬鬣、即古巨公山也。山形正方、週四十里、三面皆峭壁、惟南面可通人。有古屯兵处、即此立砦、誠有一夫当関之勢。鷗翥糾合族隣、修砦門、建屋宇、繕器械、儲薪糧、戢守具備。賊至、仰攻不一、終不得逞。咸豐十一年歲暮大雨雪、氛霾四塞、咫尺莫辨。有奸人導賊襲入。鷗翥見勢危急、涕泣誓殺賊、振臂一呼、万衆響應、声殷澗谷、當時彈火難然、惟恃短兵接戰。鷗翥奮不顧身、前驅肉薄、重傷立殞。』『莒志』卷六十一「文獻志・人物」。
- 53) 「莊彦成。字立亭。彦英、字伯才。鷗翥姪也。皆以武勇称。一善雲矛、一善鉄鞭、与賊酣戰數昼夜。砦不守、彦成督衆、救護創傷及孤露無歸者全活甚衆。彦英擊賊斃、僅存一息、援助隊救往本山望海峰。一日後方蘇、猶奮呼殺賊、問季元何在。季元者城子村農人、精棒術、随彦英擊賊、受傷幾死。後不能服農務、猶勤孝養、奉母以終。光緒十一年、知州周秉礼獎給彦英匾額、曰勤襄籌濟。』『莒志』卷六十一「文獻志・人物」。
- 54) 「自髮逆據金陵、匪氛四煽、江南之徐州日捻匪、兗沂之間日棍匪。莒之被匪、自咸豐四年始、始賊不滿千、劫掠大店汀水諸村即去。十一年二月、自北南掠、火光互百余里、馬步約數十萬。時承平日久、民不知兵、聞賊至、庸儒者皆竄伏山谷間。邑之豪俠、練鄉兵為團者以十數、雖衆漫無紀律、遇賊奔竄、莫敢枝梧。間有勇敢之士、列隊迎擊、亦以衆寡不敵、不免敗衄。賊所至裹脅、一賊數十人、為之擔負厮役、若牧者之驅羊然。其逼州城也、沈河之西、浮來之東、摩肩接踵、彌望無際、絡繹南下、竟日不絕。州城堅完、州牧福閉門守、附郭俱被焚燬、賊飽掠思歸無他志、故幸而獲全。嗣是始知鄉團之不足恃。乃各建圩結堡、以衛身家。然寨於山者十之八、寨於村者十之二。玉皇廟困於枯竭、馬鬣山敗於間諜。時村圩成者只有停溝、大店、張家莊、北杏、北汶數处。為之長者、監生于正修、道員莊瑤、理問職銜張遵漢、候選都司王鳳岡、監生王兆基等、綢繆未雨、一鄉頼之。事平、始各棄山歸村、依村立寨、星羅棋布、偏於四境、大河以南、長淮以北、所至皆然。同治丁卯、髮逆余孽任柱頼文洗竄擾山左、官軍四面蹙之、使不得逞、卒以野無所掠、疲羸悉就誠俘、圩堡之力也。今承平日久、各村之圩堡、半就毀廢、而当年衆志成城、胼胝經營、以保身家而捍患難者、其事不可沒也。故記村寨之名於左、而以堅壁清野論附焉。』『莒志』卷五十四「文獻志・芸文」管廷獻「咸豐南匪擾莒記」。
- 55) 同上。
- 56) 中国史学会濟南分会編『山東近代史資料 第一集』山東人民出版社、一九五七年、二三一頁。
- 57) 王定安『求闕齋弟子記』(中国史学会主編『中国近代史資料叢刊 捻軍』上海人民出版社、一九五二年、第一卷)一九頁。
- 58) 「論曰、用兵有法、制流寇無法、何也。兩軍對壘、勝負決於一戰、流寇不然、行蹤飄忽、可東可西、勝則踴張、敗則鼠竄、沿途裹脅、旋復成軍。有明宗社、亡於張李、洵足畏哉、禦之之法、莫如堅壁清野。堅壁清野之法、在使民結寨自衛、結寨宜村不宜山、村寨有六便、無移徙之勞、免室廬之墟、便一。連村共保、人皆素習、易於稽察、便二。廉粟井泉、取給不竭、便三。互相犄角、聲勢連絡、便四。守禦之暇、不妨耕耨、便五。寨必多置礮台、空其中、留孔三面、轟擊無虛發、便六。然又有七難焉。立寨必擇股突形勢之区、各村意存畛域、莫肯協力、一難也。寨必有長、烏合之衆、不備統馭、二難也。地狹人稠、蜂房密布、臭穢薰蒸、易生瘟疫、三難也。地曠人稀、不敷防禦、四難也。主者庸懦、則号令不一、強有力者、或妄作威福、魚肉鄉鄰、則人心不服、五難也。虛聞賊警、動輒驚擾、及其屢至、又易玩忽、六難也。富者吝財、以避匿為計、灰燼之余、版築無資、七難也。知此六便、除去七難、結寨之法備矣。乾嘉之際、行之川陝、而教匪底定。咸同之間、行之山左、而任頼授首。然則非結寨自衛、無以堅壁清野、非堅壁清野、無以制流寇、法固無闕於此乎。敢以質之知兵者。』『莒志』卷五十四「文獻志・芸文」管廷獻「咸豐南匪擾莒記」。
- 59) 「莊瑤。字琪園。嘉慶丙子科順天舉人、丁丑聯捷成進士。任工部都水司主事、剔釐積弊、吏不敢欺。升補郎中。道光二十年、簡授湖北荊宜施道、旋調河南彰德衛道。……卒以抗直屢忤當道、稱病解組歸、家居急公勸義、以誘掖後進為案、手輯式古編、復校張勳愷公課子隨筆、次第刊行、為莒人矜式。咸豐十一年、奉旨在籍辦團聯。同治四年卒。……」

三子錫縝。咸豐辛酉拔貢、授例為內閣中書、以同知分發江蘇。委辦海運。押運監兌、歷五年無纖毫誤。獎四品、以知府用。又辦理宜荊釐局。局屬七卡、司事者侵蝕稅課、需索商民、弊端百出。錫縝時權小舟、嚴密巡察、約束卡丁、上下商船、無復留難。商民感頌。

季子錫經。字拜庚。邑廩生。咸同間莒多寇患、陳玉櫻掠於前、捻匪繼之。人民東西奔避、靡有定所。父錫既奉督辦鄉團之旨、乃同兄錫縝約族老議修村圩、為堅壁清野計、議甫定。困難纏起、不為動、刻日興工、凡捐田宅、庀材料、皆先己後人。遇事能斷、工賴以成、復籌備子菜、選練丁壯。同治二三年、通寇屢至、守禦有方、闔堵無警。迄寇平後、二十余年、宵小歛迹、猶服其威望云。『莒志』卷六十四「文獻志・人物・莊瑤」。

60) 同上。

61) 「莊余珍。字希堂。世居大店鎮。幼勤於學、長而通方、以觀風試第一、受知於學使汪鳴鑾、擢乙酉科拔貢、就內閣中書職。媼母在堂、告歸侍養、遂絕意仕進。長本鎮圩局數十年、增築石堡、補建碉樓、編練團勇、至今屹然為莒南重鎮。光緒十八年、城西孟家村鄉民、掘土得漢安租界碑、業售外買、將運出境、余珍聞之、重價購回本縣、古蹟賴以保存。三十年、清廩科舉設學校、民間狃於積習、多觀望不就、余珍創立朱陳店中學、開風氣先、是為莒邑教育改進之始。宣統元年、縣議會成立、舉為議長、三年充山東諮議局議員、兼撫署審查會委員、於東省財政、多所釐刷。是冬宣布共和、電令各縣練勇百名、以資保衛。莒境綽數南北、防務尤關重要、乃由省垣購槍枝運莒、城守既完、鄉團亦成立。民國三年、改選縣議會、復充議長、地方利弊、銳意興革。常平倉穀、年久朽腐、不可食、倡議出陳易新、以穀易錢、以錢易穀、循環周轉、穀無朽腐、而存款已達巨萬。七年、天津水災、充勸捐總董、代母捐金五百元。又於山東義賑案內、經募五千元、均蒙政府褒獎。十年、邑紳以德行優異、臚實上聞、復獎慈孝延麻匾額。先是本縣成立同仁善會、旋掩掩豁、余珍捐賦地七畝余作義田。又自大店至莒城為南北通衢、獨出巨資、建修橋梁、平治道路、至今賴之。至於排難解紛、屢拯人於危急存亡之際者、更不可悉數也。民國二十四年卒。年七十有六。』『莒志』卷六十六「文獻志・人物・莊余珍」。

62) 『莒志』卷三十「經世志・教育・學校」。

63) 『莒志』卷三十「經世志・教育・學校」。莊厚澤の字は徳符（資料によっては甫・孚と記載されている）である。彼は一九二二年の段階では好意的に扱われていたが、「莒南県」では批判の対象としてあげられている。

64) 「子英、字仲華、天姿明敏、弱冠諸生。民國初元、北京法政學堂畢業。歷任山東高等檢察庁檢察官、濟寧地方檢察庁庭長、江西贛南高等檢察分庁庭長、所至稱平。山東第二屆省議會成立、當選議員、地方人民殷殷以興革相屬望。時濮陽河道已徙、工久停、而徵附捐如故、英倡議力請、始豁免。歐戰終、政府議向日本借款、抵以山東路礦。英曰、此割棄山東之漸也、乃建議選派代表、赴京請願、英預其事、聯合呼籲。南北應和、政府氣沮、議始寢。民國八年、魯案簽約之先、舉國力爭、英奔走尤力。青島接收後、任水道事務所所長、廠內機工、旧多竄斂、一意整頓、力謀擴充、添開白沙河新井、水量給足、市民稱便。民國十六七年間、國軍北伐、北軍敗退、各方軍隊、往來過境、供不暇給。劉桂堂初受撫、次莒城待編練、分駐大店鎮、軍鮮紀律、時虞反側、人人自危。英時家居、主鎮團事、委曲調劑、地方賴以保全。英勇於任事、不避險難、以積勞致疾、先余珍卒、年四十五、邑人至今稱之、惜其未竟所施云。』『莒志』卷六十六「文獻志・人物・莊余珍」。

65) 『莒志』卷三十「經世志・軍事」

66) 「總結」一五七頁。

67) 『莒志』第二五編「宗教・幫會」。

68) 「總結」一〇五頁、一六三頁。

69) 劉少奇「堅持華北抗戰中的武裝部隊」『解放』四三・四四、一九三八年。

【補注】本稿脱稿後に、齊魯書社の閻昭典氏のご教示により、莊氏後裔の莊維林氏（莒南県教委）が族譜の重修を開始しているとの情報を得ることが出来た。族譜を用いた考察は今後に期したい。

なお本研究は笹川科学研究助成に基づくものである。末筆ながら謝辞を表したい。